

## あとかき

生まれ育った美しいふるさとの姿を一夜にして変え、一人の尊い命と1,000棟を超える住まい、多くのかけがえのない大切なものを奪った豪雨災害から5年7ヵ月が過ぎました。

この間、創造的復興を理念に、着実に復旧・復興を進めてきました。ここまで復旧・復興を進めてこられたのは、子どもや孫たちに災害前にも増して希望の持てるふるさとを引き継いでいきたいと願う被災者や市民の皆さんの懸命の努力と、そして被災直後から駆けつけていただいた18,000人を超えるボランティアや国、県、他市町村などの温かい支援に支えられたものです。

私たちは創造的復興の取組の中で、とりわけ災害発生時から応急復旧の中で、難しい課題に直面し、多くの貴重な経験をして、また教訓を学びました。

この経験と教訓を後世に伝え、次に来るであろう災害に活かすこと、また近年全国各地で頻繁に起こっている様々な災害に活かしていただけるようにすること、これは多くの支援をいただいた私たちの使命であろうと思います。

しかし、この貴重な経験と教訓は徐々に薄らぎつつあるのも事実です。平成26年当時、丹波市の職員数は648人でした。そして、あの豪雨災害以降平成30年度末までに160人が退職をしました。これは職員の約25%にあたります。特に復旧・復興の政策決定に携わってきた部長職、課長職の多くは既に退職しています。また、豪雨災害以降令和元年度までに125人を採用しましたが、これだけの職員があつた災害を経験していません。これまで復旧・復興に係る資料がまとまった形で整理されていない中で、記録誌をつくることのできるぎりぎりの時期ではないかと考えました。

約1年半にわたり、多くの職員や既に退職された元職員の協力を得て、ようやく記録誌を作成することができました。編集委員会を設け、できる限り分野間の整合を図ったり、事実や認識の確認を行いました。どうしても執筆者の主観が残った部分もあることをお許しいただきたいと思ひます。

できあがつた記録誌を読み返すと、私たちが得た貴重な経験と教訓にもかかわらず、受援計画の策定や技術職員の確保、支部体制から班体制への円滑な移行、家屋被害をみんなで支え合うフェニックス共済の加入促進など、未だに課題解決ができていないことがたくさんあることもあらためて浮き彫りになっています。

今後残された課題に真摯に取り組むとともに、これらの貴重な経験と教訓を語り継ぎ、後世に伝えていきたいと思ひます。

そして、できうるならばこの記録誌が役に立つような場面が再び来ないことを切に願ひ、あとかきとします。

復興記録誌編集委員会委員長（丹波市副市長） 鬼頭 哲也